ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「毎週日曜日に、俺はここでキャンプをしてんだ」

　意外と暗いテントの中で、太一はクーラーボックスから冷水の入ったペットボトルを二本出しながら、雅也にそう言う。

「毎週？　あの、ここって……」

「おう。ふざけたヤローなら、たまに見かけるぜ。ま、俺が全員、ぶっ飛ばしてっけどな」

　太一は、片方のペットボトルを雅也の方に投げて渡す。胸の前でキャッチした雅也は、キャップを外して中の水をゴクゴクと飲んだ。そして、それをピチューに渡す。唇についた水を手の甲で拭って呟く。

「つ……強いんだね」

「あぁん？　そんなことねーよ。俺のじいちゃんに比べれば、俺なんか全然だ」

　手をヒラヒラとさせながら、太一は答える。そして、溜息を吐いた。

「最近は、随分とまぁマナーを知らねーカスが多くてよ……お前も、そんなヤローに会う前に、さっさとこの川から離れな」

「……ううん。僕も、今日はそういう奴らと戦うために、ここに来たんだ。会えるなんて期待してなかったけど、そんな話を聞いちゃ、帰るつもりはないよ」

　それを聞いて、太一は鋭く尖った目を細める。何を言われるだろうか、または怒鳴られるだろうかと内心ビクビしていた雅也だったが、そんな雅也に、太一はフッと口角を上げた。

「……てめー、強いんか？」

「……弱くはないんじゃないかな」

　挑発的な太一の問に、雅也も口角を上げて、そう答えた。暫く雅也をジーッと見つめていた太一だったが、不意に、腰のネットボールを手にとった。一瞬体が強ばった雅也だが、太一はボールを軽く放る。どうやら、戦う意思はないらしい。

　ネットボールの中から出てきたのは、小さな青いポケモンだ。頭のてっぺんにヒレがあり、頬はオレンジ色で、エラがある。

「あっ、ミズゴロウだ！」

「おうよ。この近くにいた奴だ。一緒に戦いはじめてから、もう何年になるかな……」

　太一は少し柔らかい表情で、ミズゴロウの顎あたりを指で触る。くすぐったそうにするミズゴロウが、やけに可愛い。それでも、雅也の目には、仕草の一つ一つから、よく鍛えられている事を察する。

「ホントはよ、もう一匹いるんだ。今は、飯を取りに行ってっけどな」

「あのゼニガメは？」

　雅也は、外でリオルとフシギダネと一緒に遊んでいるゼニガメを見ながら尋ねた。

「いや、ちげーよ。お前のポケモンじゃねーのか？」

「いや、違うよ。僕のポケモンは、あそこにいるリオルとフシギダネ、そして、ここにいるピチューだけかな」

「ふぅん……なるほどね。んじゃ、あいつは野生のゼニガメか」

　ちらりとゼニガメを見て、太一は一気にペットボトルの水を飲み干す。空になったペットボトルをクーラーボックスの中に戻し、太一は外に出た。

「こいよ」

「……？」

「戦いに来たんだろ？　強い奴と会えるかどうかは知らねーけど、俺は今から、この川の向こうにある森に行くつもりだ。ついてきたきゃ、ついてきな」

　そう言うと、太一はスタスタと、砂利道を歩いて行く。雅也はピチューと一瞬、顔を見合わせて、ゼニガメ以外のポケモンをボールに戻し、太一についていった。

　太一は、川を沿って、早足で進んでいく。雅也が追いつくと、一瞬だけ強気な顔で少し笑った後、急に真剣な顔をした。

「いいか？　遊びじゃねーぞ？」

「分かってる」

「……こっちだ」

　雅也は、頷いた。

　暫く進んで、太一と雅也は川を渡ると、森の入口と、その近くにある古ぼけた木板が見えてきた。『立ち入り禁止』と、木板には書いてある。

「ねぇ、星川くん。ここってさ……」

「ん？　いいんだよ。気になるなら、見なかったことにすればいい」

　平然とそう言ってのけると、太一は森の中に消えていく。ちょっと唖然とした雅也だったが、溜息を吐いて、太一に続いた。

　川は森の中まで続いており、雅也と太一の、すぐ左横を流れていた。表の木板に『立ち入り禁止』と書かれているにも関わらず、雅也達が通っている道は、人の足で踏まれている跡があるせいか、意外としっかりしていた。不届きものが多いのか、それとも太一が何度もここに来ているのかは分からないが、雅也は後者だと予想する。

　緊張している雅也をよそに、前を歩く太一は口笛を吹きながら、迷うことなく進んでいく。

「ねぇ、星川」

「あれ、『くん』が消えたな。どうした？」

「……何となく、かな？　『くん』付けってさ、なんかこう、上品な雰囲気があるじゃん？　星川には似合わないなって」

「さらっとひでーこと言うな……まっ、俺に『くん』付けが似合わねーってのは同感だけど」

　太一は雅也の方を振り返り、ニヤっと笑った。

「つーか、その『星川』っての止めろよな。俺のことは『太一』って呼べ。俺も、おめーのことは『雅也』って呼ぶからよ」

「うん。分かったよ、太一」

「おう。よろしくな、雅也」

　二人は笑顔で、拳をくっつける。

　その時、遠くから、鋭く尖った、銃声のような音が聞こえてきた。